

山行NO NO. 1799  
日時 2018.06.17(日) 無風快晴  
山域 八ヶ岳・馬蹄型縦走＝赤岳(2899m)  
コース 赤岳山荘4:50－赤岳鉱泉6:24－硫黄岳7:46－硫黄山荘－横岳9:01－天望荘  
10:06－赤岳10:38－文三郎分岐－中岳－阿弥陀岳12:04～25－御小屋尾根  
－南沢14:00－赤岳山荘14:30  
標高差 上り 赤岳山荘約1690m～硫黄岳2760m＝約1070m  
硫黄山荘約2650m～横岳2829m＝約179m  
地藏尾根分岐手前約2700m～赤岳2899m＝約199m  
中岳コル約2650m～中岳約2700m＝約50m  
中岳沢分岐約2650m～阿弥陀岳2805m＝約155m  
累計標高差＝1653m  
下り 阿弥陀岳2805m～赤岳山荘約1690m＝約1115m  
参加者 GT, KH＝2名

## 念願のハッ・馬蹄形縦走

梅雨の唯一の晴れ間に念願だったハッ・馬蹄形縦走(硫黄～横岳～赤岳～阿弥陀)を行った。

馬蹄形縦走と言えば、谷川岳が有名だが、ハッでも出来ると思った。

赤岳山荘から出発。天気は良かったが、涼しいを越して寒かった。その証拠に、赤岳鉱泉に霜が降り、氷が張っていた。季節外れの寒さだった。

北沢を上る。箴葉草(おさばぐさ)、燕万年青(つばめおもと)、黄花の駒爪、八ヶ岳黄堇などが見られた。簡単に鉱泉着。休憩なしで硫黄に向かう。途中で男の子と親を抜かす。4時30分に山荘を出たという。子供は元気だった。

大きな荷物の若い集団がいた。メツチェン(若い女子)が多かった。高校生かと思ったら、大学一年とのこと。なかなか元気がよろしい。



素晴らしい景観

赤岩の頭で一気に展望が広がる。素晴らしい景観。何回来てもイイ。早くも硫黄から下山する方が多かった。聞けば鉱泉から往復だった。好天だから往復では勿体ない。  
硫黄には3時間掛からなかった。良いタイムだった。学生さんらしい集団登山で溢れかえっていた。100名以上は居るだろう。



硫黄岳

硫黄を過ぎるとパタッと登山者が居なくなった。縦走者は少ない。朝の出立で賑やかな硫黄岳山荘着。相方がトイレの間に、ガイド登山=20名×2パーティーが出掛けてしまった。  
周辺の花は良かった。御山の豌豆（おやまのえんどう）が花盛り、駒草は、今にも咲きそうだった。長之助草が多かった。  
横岳の上りで、ガイド登山者20名+20名+一般10名を抜かした。ガイド登山は、兎に角、遅く途中で早くも休憩。ガイドも商売とはいえ大変だ。  
横岳の西側には、九十九草が沢山咲いていた。今年も期待通りだった。奇妙な名前だが、ネットでは発見者の父の名を冠したとあった。  
赤岳に向かう。ウルップ草が出て来た。まだ、小さいが独特の色が素晴らしい。随分、多かった。



御山の豌豆





ウロッパ草



横岳から地蔵尾根まで鎖場が多く、油断出来ない。ここの冬は厳しい。  
大昔、冬時間切れで、この稜線でビバークしたことがある。結構、厳しかった。  
前後して歩いていた方が、杉添尾根をスキーで上ったとっていた。確かに以前、スキーの跡を見たことがある。しかし、スキーに全くならないこの尾根に、スキーで上るとは何と酔狂なんだろう。酔狂と言えば、逆コースで、自転車を担いだ若者がいた。





九十九草



自転車若者

聞けば、自転車の重量は8kg。何と権現の観音平から来たという。自転車に乗れる山岳なら少しは分かるが、全く乗れそうもないハツである。親愛を込めて「大バカ野郎」と励ました。

天望荘着。登山者でごった返している。好天が続けば、日曜登山はしないが、今回は仕方がない。また、ガイド登山者が3パーティーいた。例によって遅い。頂上山荘まで鎖場が続くがドンドン抜かす。付き合っていたらキリがない。気の毒なのは下りの方だ。道を譲っていたら、いつまで待っても下れない。結局、横岳から100名以上抜かしたことになる。

頂上着。下山も時間が掛かりそうなので、休まず行く。やっぱり下山も詰まっている。見れば、若い女子が全く遅い。そもそも、岩訓練などしていない者だから無理。

途中で抜かさせて貰った。文三郎分岐に立った。殆どの登山者は、ここから行者小屋に下る。阿弥陀に向かうのは、ほんの一握りの登山者。何処かの方が「偉いね〜」と励ましてくれた。

ここは、今年1月も来ていた。中岳を越えて、阿弥陀の上りに掛かる。疲れも相まって厳しい上りだった。12時阿弥陀に立った。山荘から7時間だった。20分休憩して御小屋尾根を下る。ここを下るのも2~3名だった。





ガラガラの御小屋尾根を下る。疲れか足がもつれる。下から全部で3名上って来た。ここをやるのは偉い。いずれも単独だった。



大きな岩に「四区」と書かれた所から南沢に下る。1月は最低コルから下ったが、こちらは余り良くなかった。途中で立派なアイゼン一式を拾った。やはり入る人が居るのだろうか。



苦勞したが何とか南沢に下り切った。一般道の大巻の上で、大きな堰堤がある場所だった。一般登山道を下り、無事、赤岳山荘に着き馬蹄形縦走を完成させた。真に厳しい山だった。完全燃焼。記憶に残る山が、またひとつ増えた。

(了)



湯元蝮草





